

人権なら

2022年11月1日

第143号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

天理・柳本飛行場跡を歩く

三宅町人権学習講座でフィールドワーク

三宅町人権学習講座が10月15日にあった＝写真。

第4回目のこの日は柳本飛行場跡をフィールドワーク。「天理・柳本飛行場跡の説明版の撤去を考える会」



共同代表の高野眞幸さんが案内した。参加は24人。

コースはJR長柄駅—柳本飛行場跡説明版—滑走路コンクリート面—コンクリート製排水路—防空壕（通信基地）—掩体壕（あんたいごう。戦闘機を隠す場所）—JR柳本駅西側の海軍施設部跡を巡った。

高野さんは天理市在住で元高校教員。県内の戦跡保存や戦争中の出来事の真相究明に携わっている。

市が設置していた説明板を市が不当撤去

現在の柳本飛行場説明版（写真）は、市民有志が私有地に設置したものだ。元々は天理市と教育委員会が1995年に設置したが、2014年に撤去した。再設置を求めているが、市は無視している。元の説明版には、「平和を希求する私たちは歴史の事実を明らかにし、二度とくりかえしてはならないこととして正しく後世に伝えるために設置いたします」と記していた。

柳本飛行場（正式名＝大和海軍航空隊大和基地）は1945年6月、沖縄戦の降伏のあと、本土決戦に備え、近畿で米軍が最も上陸しにくい場所として選ばれた。飛行場は、陸軍は八尾に、海軍は柳本に造られた。天理には天皇の「御座所」用トンネルも掘られた。

柳本飛行場の建設を請け負ったのは大林組。工事には多くの労働力が必要で、県内からは小・中学生、

大学生、労働奉仕の市民、予科練の少年兵、そして多くの朝鮮人労働者が従事した。

建設工事には多くの朝鮮人労働者を徴用

朝鮮人労働者はそれまで日本に住んでいた家族連れなどのほか、朝鮮から徴用（強制連行）された。柳本駅西側の海軍施設部には「慰安所」が設置され、朝鮮人「慰安婦」が連れてこられた。飛行場は1945年2月にはほぼ完成。鳥取の航空隊から54機の練習機が飛来した。



参加者は当事者への聞き取りや、文献を通してしか分からない話に聞き入り、「朝鮮人徴用工」問題や「朝鮮人慰安婦」問題に関心を抱き、日韓・日朝関係をどう捉えるのかを考えることができた。

天王寺・文の里夜中の存続を

生きる権利・学ぶ権利を訴え、書籍を出版

大阪府・大阪市による天王寺・文の里夜間中学廃校策動に対して存続を求める運動が高まっている。そんななか、1969年に市民の開設運動により生まれた夜間中学が日本の教育、社会に問いかけた意味を明らかにするため、急ぎよ、『天王寺・文の里夜間中学の存続を—生きる権利と学ぶ権利がすべてに優先する』（夜間中学卒業者の会編）が出版された。



生徒たちの「私たちの学ぶ場を奪わないで」「学ぶことは 生きること、学ぶたび くやしく、学ぶたび うれしく」との声が胸に響いてくる。解放出版社・1,800円。

水国争闘の現場を歩く

河合町人権学習講座でフィールドワーク

河合町人権学習講座が10月20日にあった。第2回目は「水国争闘事件の現場を歩く」をテーマにフィールドワーク。吉田栄治郎さんが案内した=写真。主催は人推協とNPOなら人権情報センター河合支局。



10月7日に実施予定だったが、雨天のため、延期していた。この日は汗ばむほどの陽気な天気だった。受講者は役場に集合し、マイクロバスで下永の教願寺に移動。そこから中街道を歩き、衝突現場を経て鏡作神社まで、2時間半、約3.5キロを歩いた。

水平社と国粋会が4日間にわたって衝突

水国争闘事件は水平社と国粋会が1923年3月17日から19日にかけて田原本町八尾付近で武装衝突した事件。婚礼道具が運ばれる道中、八尾の住人が誰の荷物かと同住人に聞かれて指を4本出した。居合わせた2人が抗議。帰宅後、水平社員に報告した。水平社側は40人が抗議に押しかけた。八尾の国粋会幹部が「自分の顔を立て引き上げてくれ」と求めたが、水平社は拒否。双方とも県内外から援軍を動員する。

翌朝、国粋会側は日本刀、鳶口、拳銃で武装して鏡作神社に。水平社側は竹槍で武装し教願寺に集結。両者は「鍵ノ辻」付近で衝突。国粋会側は水平社の2人を日本刀で斬り、重軽傷を負わせる。水平社は関西全域に応援要請。武器も猟銃、棍棒、日本刀などを増やし、総勢1000人に。国粋会も全国に応援要請。総勢1200人を動員し、寺川の両岸で対峙する。

水平社側には有罪、国粋会側には無罪判決

県知事は警察部長を現場に派遣。大阪府警も300人の警官隊を急行させ、奈良歩兵第38連隊も待機。

衝突で双方に負傷者が出たが、官憲が制止。警察部長が調停し、両者は手打ち。この時、検挙されたのは、水平社側が駒井喜作、泉野利喜蔵ら35人。国粋会側は中西常蔵ら8人。奈良地方裁判所は水平社の駒井には有罪判決、国粋会の中西は無罪とした。

水国争闘後、運動の変容や水平社への恐怖も

吉田さんは行き先々で事件の背景、水国争闘後の水平社運動の変容などについて説明。当時の社会状況と差別事件の多発、水平社内部の思想闘争、(部落)民族主義的運動から階級的連帯を求める運動への転換などを語った。また、社会状況の変化としては、水平社への恐怖、差別意識の深化をもたらしたと指摘した。



「橋のない川(第2部)」を鑑賞

部落問題全国交流会で糾弾要綱を議論

部落問題全国交流会の事務局会議が10月8日に京都市内であった。映画『橋のない川(第2部)』(今正監督)を鑑賞したあと、映画「橋のない川(第二部)」糾弾要綱(写真)について議論した。

糾弾要綱では、当時の時代状況、とりわけ、部落解放同盟内での共産党との対立を背景にして、朝田善之助の「三つの命題」を根拠に、この映画を「興味本位」と「営業が目的」と規定。「部落差別を助長拡大再生産する」ものだとして「差別映画」と断定している。

議論では、糾弾要綱の問題の立て方、糾弾のあり方、効果、共産党との対立など、さまざまな問題点を指摘し合った。論議を通じて共産党の部落史観や、国家・社会観が映画作りに投影されているように感じた。『同和はこわい考』を読み返してみたいと思った。



時代の転換点に立って

奈良県人権・部落解放研究集会が開かれる

第49回奈良県人権・部落解放研究集会が10月1日、橿原市内であった。集会テーマは「水平社創立100周年『日常を、取り戻す』—戦争・コロナ禍、時代の転換点に立って」。

伊藤満・実行委員長はあらゆる差別の撤廃と、共生社会の実現を目指す研究集会の発展にまい進する。水平社創立100年、「破戒」が60年ぶりに映画化された。ウトロ放火事件、コロナ感染者への偏見・忌避意識、ロシアのウクライナ侵攻に触れ、差別や忌避、誹謗中傷によって不安を切り離す行為が社会の分断、軋轢に繋がると語った。

このあと、「熱と光のショートレター」の表彰や、ウクライナ避難者、オレナ・クシナロワさんのZOOMによるアピール。天根俊治さんの基調提起があった。

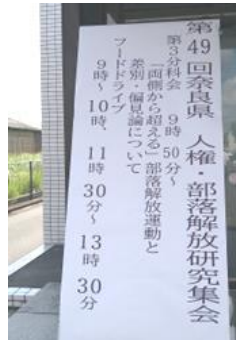
内田樹さんが講演「人口減時代の共生社会」

記念講演は神戸女学院大学名誉教授の内田樹さん(写真)が「人口減時代における共生社会のありかた」をテーマに話をした。内田さんはまず、安倍国葬の批判とともに内閣支持率下落で喘ぐ岸田政権の現状を厳しく批判した。

本題では、「21世紀末の日本の人口は中位推計で6千万人を切る」と言われている。だが、驚くのはそれがどのような社会変化をもたらすのかについて専門家による予測がほとんど行われていない、と言う。

資本主義は「崖っぷち」にあると語り、各国の人口動態を紹介。資源、食料や労働力人口など、何一つとして先行きが見えないどころか、格差と分断が進み、「レイシズム」などが生じ、深刻な状況だと述べた。

最後に、「一人ひとりが真っ当な大人として、マイン



ドを切り替えるしかない」「ダイバーシティ社会」(多様な背景を持った人々や価値観を包含し受容する社会)や、「ホスピタリティー」(丁重なもてなし。また、もてなしの心)の精神が大切だ、と語った。

解放運動と差別・偏見論に基づき論議

分科会は4つあった。第3分科会『『両側から超える』—部落解放運動と差別・偏見論について』に参加した。進行の大寺和男・人権保育研究会会長が、2018年研究集会の基調報告「差別・偏見問題に心理学はいかに向き合ってきたか」(池上知子・大阪市大大学院教授)を基に議論を重ねてきた。今回は具体的な取り組みを通して議論を深めたいと提起した。

報告1では、丸橋文代さんが「子どもの居場所づくりをめざして」の題で、かさがみ(大福吉備の呼称)子ども食堂の活動を軸に話をした。地域史冊子「かさがみのはなし」の作製・配布についても報告した。

報告2では、伊藤満・解放同盟県連委員長が「まちづくり」をどう展開するか、をテーマに話をした。問題意識は「部落アイデンティティ(あるいは部落の地域アイデンティティ)をもって生きることのできる社会」の実現だと言い、「まちづくり」のイメージやさまざまな側面、そして、「接触仮説」と子ども食堂について紹介した。手探りの報告だったが、興味深い話だった。

「接触仮説」は部落差別解消に示唆を提供

報告3では、奥本武裕・天理大学非常勤講師が「部落差別解消を展望する地域社会の創造」と題して報告。大福・吉備地区の固有地名(笠神)と地域史を説明した。部落差別の解消を展望する地域社会づくりのためとして、地域社会が持つ「排除と包摂」の側面を紹介し、分科会議論を重ねてきた「接触仮説」は部落差別の解消=社会変革にとって示唆を与えてくれると、意識調査の結果を基にして説明した。

研究集会では、フィールドワーク「橿原市周辺の人権ゆかりの地探訪」と、巡回展「先住民族アイヌは、いま」が同時開催された。

奈良の戦争遺産を歩く

県民歴史講座で教育大界隈をフィールドワーク

奈良県同和問題関係史料センターは10月25日、県民歴史講座を開き、「奈良の戦争遺産を歩く」をテーマにフィールドワークを行った。案内は深澤吉隆・所長が務めた＝写真。



奈良には、文化財が多く、戦争被害は少なく、悲惨な状況はなかったように語られているが、多くの戦跡が存在する。

現在の奈良教育大学を中心に奈良女子大付属中等教育学校、私立奈良病院、紀寺団地一帯には、「奈良聯隊」跡など、数々の施設があった。

1909(明治42)年、日露戦争後の軍拡で陸軍歩兵五十三聯隊が新設。1925(大正14)年に軍備整理のため廃止。その後、京都深草から三十八連隊が移駐する。1934(昭和8)年に満州に進駐、中国を転線し南京事件にも関与。1944年、南方に転進し、同年7月、グアムで全滅した。教育大学敷地内の土塁跡や弾薬庫跡も見学し、紀寺団地内の滑走路跡へ。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

円安、物価高が続く。生活苦を感じる人は7割を超える。賃金は30年間も増えないまま。貧困に喘ぎ続ける人が多くいる中、富裕層は135万人もいる。不合理極まる格差だ。大企業も潤う。コロナ禍でも最高益を上げている。内部留保は500兆円を超えた。アベノミクスの結果だ。異次元緩和で金利を下げ、国債を乱発、株高を誘導する。米国の利上げの煽りを受け、日本経済は今、身動きできない。崖っぷちなのに、軍事費倍増へ増税を企む。年金は減少。医療費は負担増に。教育、社会保障も削る。庶民を犠牲にして経済危機の乗り切りを図る。限界だ。政権を代えるしかない。

「梅園の野神」を経て「璉城寺(れんじょうじ)」へ。境内には、緑十字船阿波丸事件の慰霊碑が建立されている。1945年4月1日、軍事物資を輸送していたため、米国の潜水艦に台湾沖で撃沈されたと言われる。

「崇道(すどう)天皇社」を経て、「徳融寺」へ。徳融寺は融通念仏宗。中将姫はこの地で育った。観音堂裏に父子の石塔(鎌倉時代の作)がある。また、吉村長慶(1863～1942年)が自像とともに建立した風変わりな石碑もある。吉村は生涯に200以上の石造物を残した。奈良市議会議員を務め、平和運動にも取り組んだ。



聯隊跡・防空壕跡・憲兵隊跡などを訪ねる

「鳴川町防空壕跡」は、現在は埋め戻されて奈良市音声館が建つ。「元興寺」の啼き灯籠は鎌倉時代の1257(正嘉元)年に建てられた。奈良市内で年号が確認できる灯籠では2番目に古い。1944年12月7日の東南海地震で倒壊したが、2010年に修復した。

この大地震のとき、軍部は軍需工場の被害状況などの情報が米国に漏れることを恐れ、情報統制を実施した。箝口令が敷かれ、被災地は孤立無援となった。

元興寺(写真)は558年に曾我馬子により建立された。広大な敷地と数多くの伽藍があった。遷都以後、力が衰退。現在は塔跡、極楽坊、小塔が散在する。極楽坊は1998年に世界遺産に登録された。

最後は、現在、自衛隊官舎がある「奈良憲兵隊分隊跡」を訪れた。この辺りは被差別民衆の活動に関わる伝承や記録も多くあって、興味深い地域だ。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/